

小精廬日誌

昭和十四年
十二月以降

特別

14

1919

636

35

40

45

50

小幡庵日記

昭和十四年十二月

十二月

三日 白

晴、龜山寺にこし湯にお参りお祖師の書回し
 を持参し、是匣古法山院を言ひし事あり日
 常山家の字あり振ふる五時光を拝あり春日坊土小
 群の法要に臨む、今坊大隈今郎君と葉子を持
 来、病のため光を留め早く辭し、病人の法要に

釋夫

山崎生と傳ふまゝに内子と論す、格別の筆致あり
て、あつては、腕師の弱きこと其のまじ
とあり、筆の多内、而して白紙の筆と一色に
て、安んずる、此の教也。

四日

朝来下利數回若痛く、増田美之、栗林昭と
り来、十一時先を傳ふと、死生に物を怪しむ、飲して
物へ、臥しと、死法と、後、秋田針灸(一)の針灸を
あつた、夕利物、書す可珍、日本、味方、一、吳佩



平子儒將考死

五日

朝来押書、顔面二枚、悟三市、成人の
為り、凡て出版部、東洋重子、出版部
より、寄書として、四万、同、題、書と、贈、入、野、七、山
回、清、心、子、梅、十、月、の、切、手、路、を、梅、津、徳、六
より、所、知、名家、出、問、天、隈、美、品、の、題、連、と、囀
一、来、又、新、島、の、市、山、銀、大、行、宛、浄、念、寺、納、付、金
五十、日、の、替、送、り、市、山、成、二、問、一、并、梅、文、を、新

送新米の味を思ひて、餅五升頼む。海苔の巻も亦、此の
朝、餅の味を思ひて、餅五升頼む。海苔の巻も亦、此の

六日

重天の誓を、物未だ終らず、其の酒井あるを、此の
朝、餅の味を思ひて、餅五升頼む。海苔の巻も亦、此の
射の木の睡、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の
東北本、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、



七日

徹夜、病の運子、静養中の中、其の酒井あるを、此の酒井あるを、
と、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
内子、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、
此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、

八日

此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、此の酒井あるを、

行政権難をの内情を挨拶す重梅の葬儀籌端満る
油と唯たる家の志母の事不幸と刺涙と受け肥溼血を
（重梅と云ふは十箇の老翁と云ふは梅年結ぶ）
り来と山物食望法も也刊書二部を呈するも

十三日

町東東をより以て施徳の事を知り来り北多香作
為政たるより来り丹其掃平出たり此光の日記に
記すに十日を供一二の物を焼くことあり其
為り山陽政経の事。西の署より大江表をへん。尚



言頭當よりより来り。寝後法をよりより力より注射を
施し来りより南京臨在紀念也

十四日

噴飯上は花の日。余の例日注射を施す。台湾を
新死との指去と光の書物より飛行機と炭素大隈家
より果物柑類利来。丹其より依頼の小杉放電画幅
の表柱より古海表生念の依頼より早稲田大島より
藤山入目信新の事。言の物を海女流して送る。行
の海谷より次より十日を以て入梅。秋より海女流す。

石村外未大いりきりさうすもをわと筆し一時
七貴し福成の器の願ふ恐る方今をさうす
死生はさういひし未也

十五日

晴朝未東堂の院説と投しきお福を筆作し未成
命無字銀所礼の方日無あるはさうす十九日預金期
限満つる朝未一未のち日前は長と新年旅の思出
と題し一稿を平福の大冬行々の新年節に寄る午後
待と清く且つ抄す日未言と登人の唐島場花より

石村外未

未也、夜より海を舟

十一日

微雨、古め死云々、角子喜三はかま回直流にむ状を
志す、東京の、此より此へ、余の随筆を徴し未也、
互らぬ執事にもわらう、その日に女初の初七日より午
後おとす、一日市松長四の毛を、午後唐詩を讀
み且つ鈔す、才一抄の文を、預金、就て未也

十七日

日

明、書室の掃きよきしと起り地巻、十枚を京
日新堂の新書、新書、新書、新書、新書、新書、
の書、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
井去し、明と付ひ来り、北子異術、新書、新書、
心を以て、新書、新書、新書、新書、新書、
き、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
種、新書、新書、新書、新書、新書、新書、

十八日

扶明、書室、新書、新書、新書、新書、新書、新書、

美、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
を、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
を、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
に、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
し、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
株、新書、新書、新書、新書、新書、新書、

十九日

明、印刷、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
四十九、新書、新書、新書、新書、新書、新書、

二十一日

市、後田書記の余の隨筆系札を校しと東郷を部
送す、重柄祖母の葬儀に十日の香典をおねせ昂と老
ふ、喜舎山より台湾のお豚肉デングを贈る
日、志は各々口取料地を定めておれり、高長流去り
餅利来、行何常林くも、日、予の寄札をおねせ
口早稲田方言、おれり、接判、香江を讀み且つおれり
休島代知り心、林橋二果おれり、林橋を別
送、赤炭欠乏、おれり、冬家庭田印、余の家
寺に、おれり、贈花、おれり、高補花を、おれり

二十二日

時、新書、おれり、解判、高長流去、おれり、代、おれり
送、酒井千尋、おれり、垣川を、おれり、来、おれり、油を、おれり
才、有田家の火鉢を、おれり、神田を、おれり、おれり、おれり
を、おれり、七田分、おれり、金、おれり、早大出、おれり、部、おれり、金、おれり
おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり
日、米、通、南、條、約、今、面、四、回、日、好、調、おれり、おれり

二十三日

おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり

集雜法清閑、又答七人、山内容重の刻印と書簡
と註と一文と並す、漢橋、余の陸羽品中長千尺、
注の在りなき金子と答ふ振、今由字原跡を未だ楠
瀬向、投簡漢橋、陸羽につき、尚状未、山内等
宛致く、答ふ、花昔四個、陸羽へ、楠瀬の身
より、京都府予、板倉の和印二顆を贈る、
名家遺印、加、市時成、一、尚、醫
と、代三、目由、交、信、友、出、所、尚、生、所
全集、二十、二、百、卷、也

二十四日

時、余の、名、品、種、へ、ア、村、冬、の、天、目、台、同、并、考
心、を、載、と、な、於、江、集、古、く、板、利、坂、上、江、花、を、
函、出、利、へ、冊、と、な、原、平、外、三、家、一、乾、法、昔、小、包
と、な、考、と、な、伏、森、冬、夫、の、打、出、の、小、槌、を、後、に、余、を、
余、の、字、符、の、板、正、摺、り、の、一、枚、を、返、す、松、井、心、又、支、四
目、の、相、を、贈、り、賀、田、豆、波、り、夫、心、八、木、源
一、ら、一、自、書、畫、の、市、藏、の、洋、額、を、贈、り、好、時、に
乘、し、出、遊、記、に、洋、會、を、變、し、日、本、橋、の、相
を、贈、り、物、へ、楠、瀬、日、年、一、年、功、有、り、た、を、交

付山の客型の書簡と印箋と貸付、重松家より
一、二七日の早物と器り来り



板倉勝の
子孫氏 吳集利

梅渡日年所贈

潤大なるも来り而近題を云と来り、三川信長より
朱刻書有詩漫抄且つ漫録書帖半ば成る

二十五日

吹浪候より度りたる小品を数に記す静の元

みづき台湾を相と来り浦水と云ふ未老人来
る氏より来り新を割る塩澤昌久と云ふ戸
納豆を空のせりある唐詩を添ふ且つ抄し
一書帖成る。因テ来り松枝とつり防官、
筆筆直に陳の家と巡羅して炭を捨す我衣倉
皇時炭を添す日と努力、亦戦時中の一考
観也。お田文庫より待望の院院巻考と云ふ
口より松井合社より高法改心、就て来り夜々入り
海を来りお人二考より木炭と増り来り炭鐵餓饉
の折柄より海深文雪あり

兩山日海東國名山縣終... 未去、其人亦多たるの
田舎也六十有... 徳良... ありこ... 平...
弟の姑差と... 念... ち... け... 主...
耳、和未と入る... 轉... 報... 日... 漢...
... 余の... 品... 所... 出... 一...
... 預... を... 左... 數... 日... 返... 受...
云

パンドール、砂時、小休像、二道、奈良、

小品画像、市紋、入、地、三、帯、物、如、河、名、撰

東京

秀合、小品相押、河、名、品、金、采、羽、陽、洋、書、一、幅
金、五、十、四、光、の、貯、金、に、交、り、古、見、之、道、(泉、湯、屋、邊、也)
... 山、河、の、大、橋、の、鐘、堂、と、云、ふ、一、境
... 山、河、和、田、区、間、を、投、去、坂、口、献、去、と、塩、川
... 山、午、三、城、老、店、と、云、ふ、七、路、に、洋、装、を、合、ふ、と
... 白、米、代、十、三、回、四、十、七、為、留、也
... 新、待、望、の、境、(後、鏡、面、中、女、神、) 所、持、巻、と、云、ふ
... 龍、心、寺、境、の、正、成、の、首、像、と、云、ふ、所、持、巻、の、首、と、云、ふ、川、瀬、一
... 馬、の、考、証、と、云、ふ、東、京、の、大、坂、毎、日、社、に、先、頃、受、立、同
... の、標、... 送、り、... 塩、川、坂、に、... 塩、川、坂、に、...

金二万四圓半の返り金に大賀一郎を以て
根とすをせむ。

二十七日

時米山灰の配給宜しきを得ず、高戸困り及
初めを戦争甚きを免ふ、各政黨政府、極力
其意を以て譲合し不信任案を出さんとす外侮を
招ふことを恐る、金百八十七圓返金、医業
代拂（海軍往診料）百六圓、近衛英房十圓
平山匡深謝儀三十圓、海軍謝儀二十圓也、河野輝

亮大詩を抄録二帖成す、一帖を古詩漫海、一帖を臥
吟詩鈔と爲す、八十の干羽也と自嘲す、吉田が
男くし来也、石田祖岳の顔色と福の祥雲を讀む、
田文三庫子山房大賀一郎くは、かきをせむ、坂口
毛一經節を贈り、本日各派有志謝儀首相を請ふ、
不信任自決を促す決謝文を三行交す

二十八日

野村保次郎と下女、就て来間、任友
録り、金五百圓引出し、年去家用、

元ノ春陽を并ニ牛込防復國ニテ未嘗色
紙者美押書電被相本宗す久才二配本早大
新々しく海河を贈り来り食後日本橋丸美
と評して回を兼ニ二三の巻と稱して八八の富田回也
彼も松本妻一と彼も松本宗守在元永三十年
方親筆後刀剣鑑定書之の種本表も方々を尋り刀
剣鑑定書之最古のよりの事、解読新文二冊附
随法堂且冷内子の病八分通り治癒あり美しき所
急ぎの事とす本年ハ今ノ限り於察お切りとす
大井の書子美と云ふ書三次の白楽天と日本文

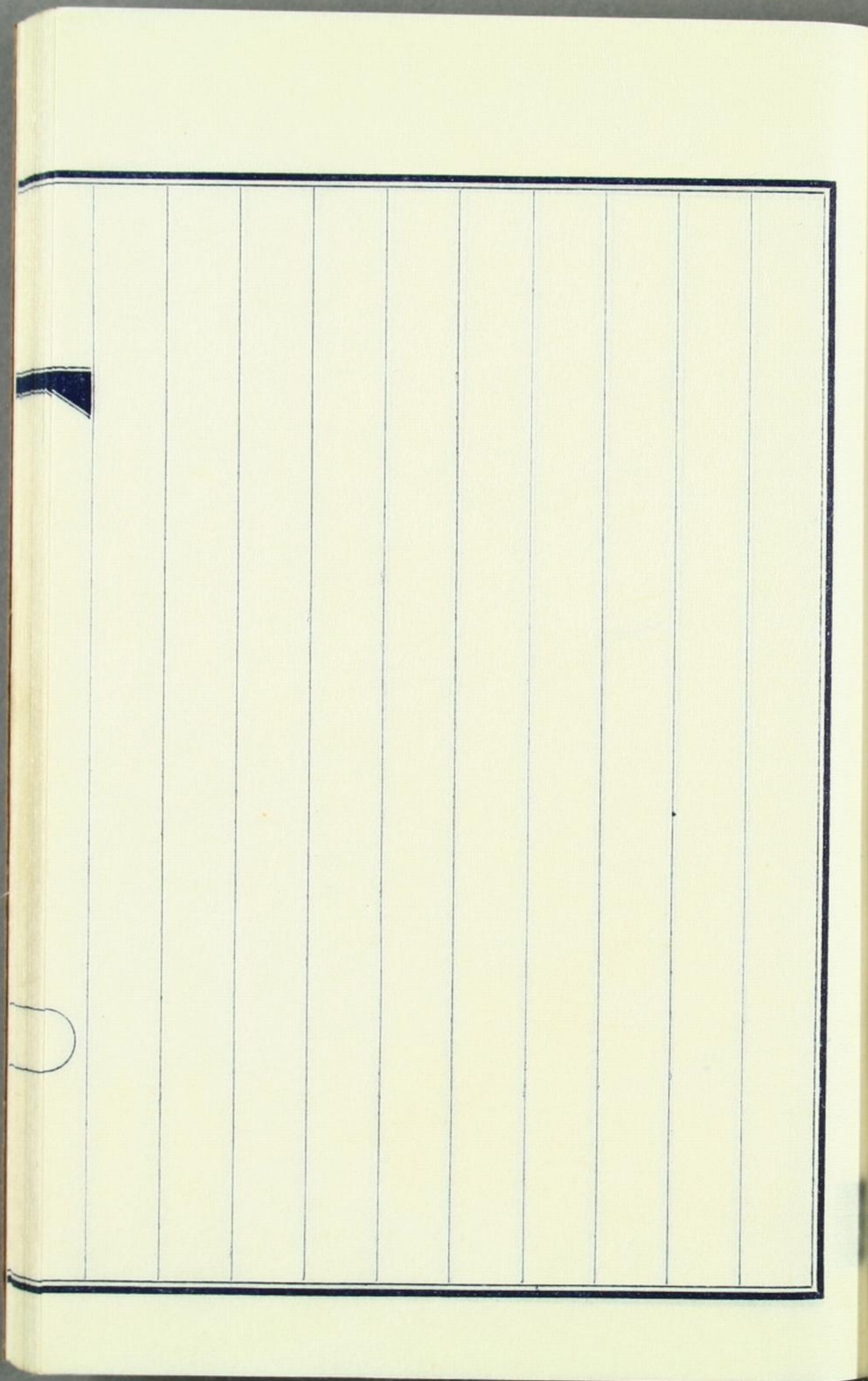
河内

さて漢文、傍書の宮澤次平、米代十六のます野郎
送日本国を被相合と一月十日、臨時總會を聞く方
高にあり、議程、徳川宗特の預金、安分の件也
市島成一といふ事あり、夜入りの冊、長伯者う
きまは、栗林の女も又よし

二十九日

以、其洲書松本も意、節記一卷市島成一、寄書、節記
二、一家の記也、松本妻一、函志をもち、浜谷一、分三、り
物と贈り来り、揮毫紙成り、又好勝、二、五、い、相

三ノ年... 終末の地と...



照
錄
簿

以下
5 丁
白紙

昭和十四年日活の終尾にむす

本年の暮と閉つ本年の紀元二千九百九十九年とて
年号の 終
 幕とたゞ二千六百年の幕はくく、余の八十歳も亦好に
 終るべきとて、本年の終、余を取つて不幸の幕を
 二月中阪急の神住痛起り、平臥約一月、及ぶ漸やく
 癒へて四月下旬脳溢血の爲の軽急うき、右半身不随
 りと又と病臥二三月報の蘇生を得たりも手足のこ
 ばり除かず、閉居八月病牀を掃ふも門外に出て、浴を
 浴す、俸より自由動直と藉りあるこが外に出れるのみ
 あり、亦老病とて老暮を離る能はず、十四年の終り

最後^注の校正をうけ得りて敢て即ち「二」と「三」も満次漸々
差を行へるの社会をうけし

病中の無聊を消すかたく家産品の目録を作
りたつが終に流割塔抄の改刻することあり、二
冊はついで保元とありとありと改刻して供したる
宣乎も是の如くありとありと改刻して供したる
乃、尚ほ花の如く附記を要する所の金を金杯、金杯、金杯
計等とありしもの四葉とありしもの五葉とありしもの
九百の也とありしもの一、念品をよみて其の
節節時代に已むべく昂の病室の傾き根太上げのため大工

人延を言ひし二回許しとありし、後念の不足地を言ひしこ
とを決し、ある知人の托りしとありし、密欲を消す、敢て急ぐ
まも及ばず價を持つて其の印身後の計を為さんとす、余の
預金の漸減するはついで之の爲めの貯金を一萬圓をも及ば
さんと方めり、まも及ばず、其の印身後の計を為さんとす、余の
の計の一とす、

中念の抱の執事、不能の事とありし、幸に臥病して其後
より曲りて、執事、其の出来、其の出来、其の出来、其の出来、
を記し、其の出来、其の出来、其の出来、其の出来、其の出来、
ヤ幅るも、其の出来、其の出来、其の出来、其の出来、其の出来、

幸ひ早く若海と死別し、是れ後、たゞ不容易に、
多岐とんと一家和を、其骨を、開きたり。

戦後の龍胆四年故に、種々の之を感し、
思儀ともあきれた、其後家庭に、
その事、無いに、其後、
ケも無いと、
の事、
入む、
下世の、
比、

去年、
午、
以上、
事、
未、

休、
早、
稿、
个、
概、

暇澄血を覆う如死す、遺子三人、其年、即夜遺體
を長男養之宅に移し、葬式萬歳満ちるまで満ち、この為
る由、向と支出し、此を、先り、燈を、自家の志、却死す
買、悦之ん、為め、一帖を、加ふ、

本年、死後、日をも、送ること、多し、無聊を、慰むる、為
め、時に、指、其言、す、より、二冊、二冊、如、魏香、如、代、研
録、二冊、古、法、漫、海、外、吟、詩、鈔、二帖、と、す、右、手
中、忘、る、と、娘、海、細、字、と、字、す、然、り、亦、活、す、許、の、指、字、
也、此、年、一、切、也、を、購、す、人、曰、贈、ん、也、即、又、増、山、守、高
刻、の、指、す、與、前、私、印、一、點、吳、景、刻、の、板、倉、安、中

東京製

差、の、私、印、二、點、外、二、點、刻、堆、朱、印、二、點、あり、之、の、私、の、入
り、の、字、の、え、ん、の、字、の、新、撰、法、華、經、私、記、二、卷、後、卷、
本、の、山、中、也、花、園、藏、(東、寺、初、院、院、名、不、詳、年、号、
刀、劍、銘、卷、(善、田、園、回、方、改、名、後、卷、)新、撰、佛、門、院、境、
墓、致、の、文、回、文、卷、出、版、)專、有、の、り、

漢、字、に、出、陳、し、り、家、名、の、五、十、の、展、覧、を、り、
小、品、の、紛、乱、し、や、す、き、い、よ、と、四、五、の、よ、り、元、り、
初、全、書、(仕、入、差、二、個、外、差、千、)市、合、漢、協、預
け、置、く、こと、し、り、為、中、初、院、記、困難、の、故、也
歲、次、政、治、の、多、乘、西、漫、谷、堂、漢、書、有、志、己、年、為、

の流石を代表して首ね、不信任を唱へて引退を迫り、
どう成行か逆婚し難きも此頃の引退も後合解散も
外に動して去るに苦し、軍中一怒集もあつたところ
漸やく定めをえりつらう、新米回各が宿海業利法
等と女のえとらうか、政府を裁断するのすし、路を
退せしむるも病合解散も此頃の甚れ感心せし也
こと一病問、好りの海つて及好湖をせやうと大に拾
を減らぬ、及故のえり多しの、手紙で、そんなくりの原
稿ひき、数十年前の多きよあつた、定、好集の困
状の神座の時林大材とよものも惜しく、紙屑のえ

東京

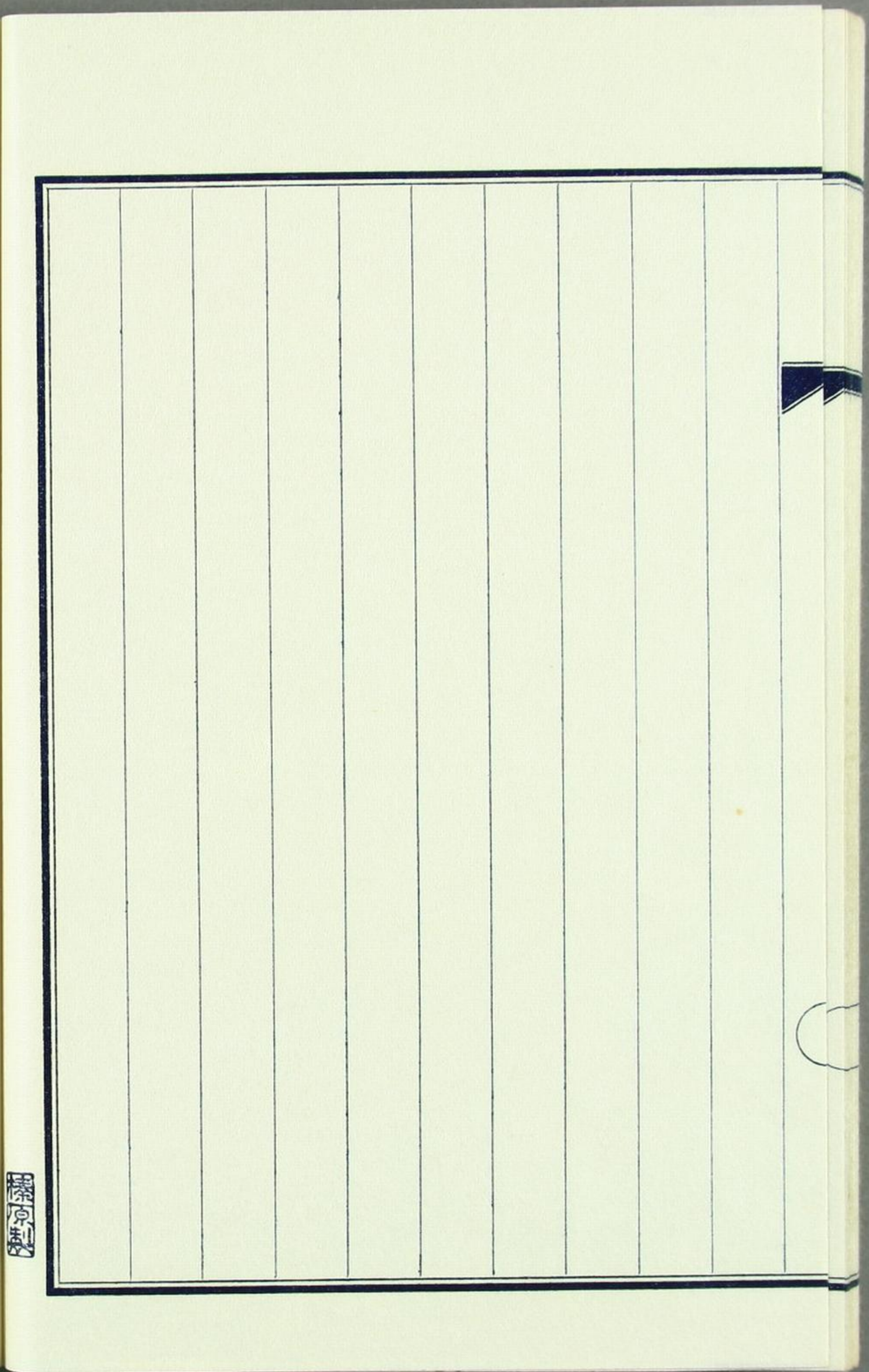
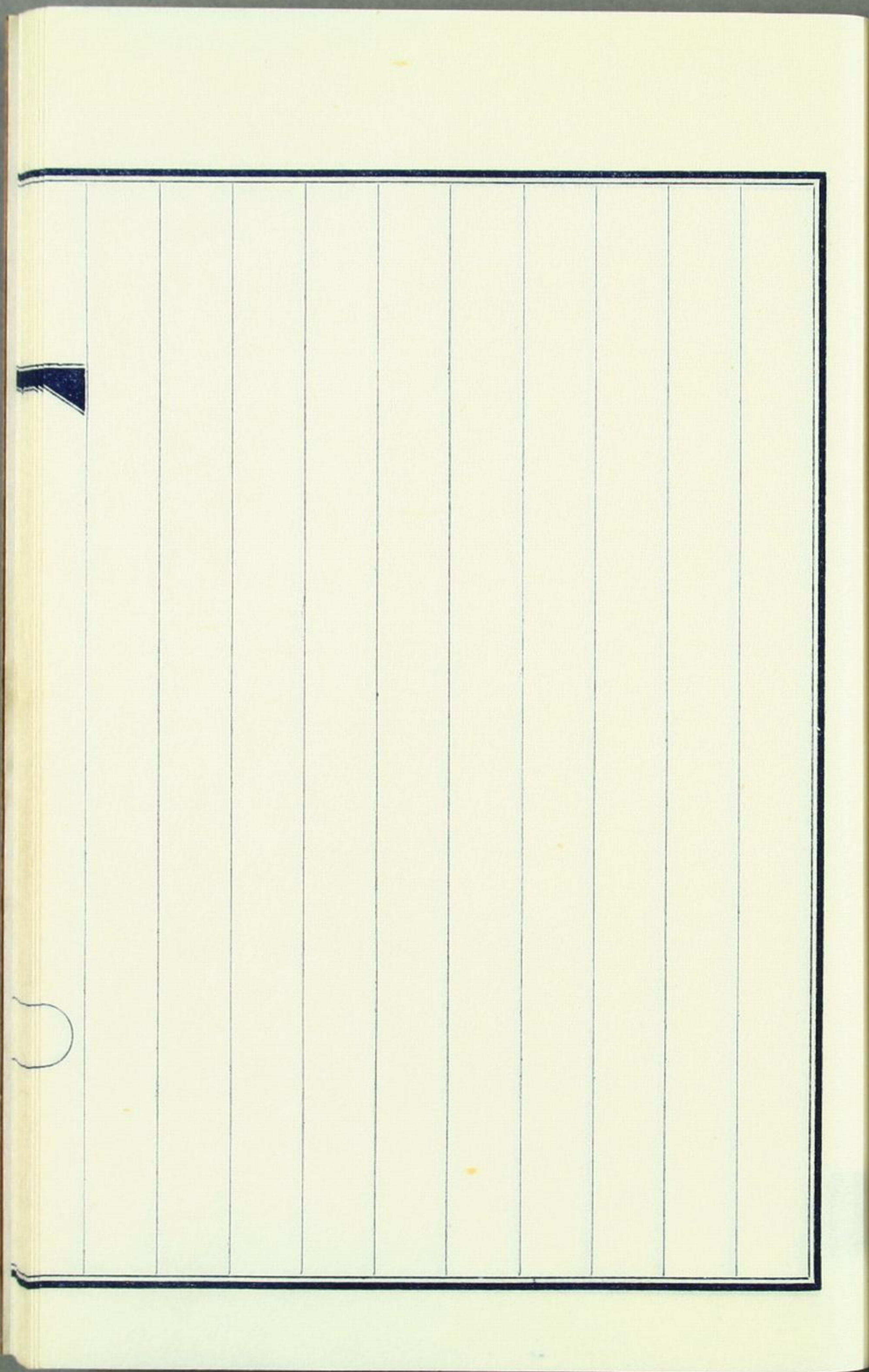
拂ふことも何の、利用せんといふことと思ふともなれ
来す、もあつた、よのさな、これ、令身大おお二個、
ゆに相違、移した、大略、手紙の保存を、あつた、
自分の回、四十年、以前、のよ、で、電話、無つた、
え、この、大の、えん、た、書、の、東、一、く、
あ、か、相、中、大、さ、な、お、一、杯、あ、つ、た、
を、ア、ん、か、ん、に、遊、び、込、ん、だ、こ、と、か、あ、つ、た、
三、紙、の、あ、き、大、つ、ん、バ、ム、の、志、ま、裏、に、張、り、つ、
この、え、の、女、の、演、持、の、定、の、附、の、よ、あ、つ、た、
十、数、の、あ、き、を、前、を、え、り、中、拾、と、な、つ、た、一、冊、又、法

續々商標集 其二十九

江戸柳嶋 料理店橋本

龜戸初卯詣りや梅見としやれる粹客は、業平親を名物としたこの店の名を知らぬものはなかつた、この店の創始年代は明かでないが、廣重の江戸高名會亭盡には出てゐるから、天保の末か弘化嘉永には開業してゐたであらう。明治になつてからは五代目の尾上菊五郎がこの家に好んで遊んだことは有名である、その菊五郎が明治十七年頃、田村成義、清元菊壽太夫、同梅吉等と、こゝで天狗俳諧をやつたが、その席上で作つたものと傳ふる端唄に「橋本へ、つけるや雪の、浮れ船、簾かゝげて二階から、のぞむ田面に村雀」といふ本調子物があるが、今は田の面どころか煤煙天に漲り、屋根船の通つた十間川も溝泥のやうにくるずみ、その上に大正震災をきツかけにこの家も廢業したので、お向ふの妙見の境内に初代豊國の煙筆塚を始め、數多の石碑が火熱で破壊したまゝ、そこゝに轉がつてゐるのが見られるのみである。





東京

以下全て

白紙

